神の剣 悪魔の剣／*Sword of the Demon*（1976）／リチャード・A・ルポフ（厚木淳訳）／東京創元社（文庫・10/21刊・¥300）

いずことも、いつとも知れない世界、そこに目覚めた鬼子母は、綱の国の制覇を目指す、愛染明王と弥勒との戦いにまきこまれる。戦いは須佐之男、大国主、茨木童子らを交え、さらに混沌さを増していく……。

ミロク、キシモ、アイゼン、スサノオ――と、これだけを見て、何を連想されるだろう。日本神話だろうか。けれども、これだけから、日本を舞台にしたSFと考えると、読み違いを起こすことになる。実際、既成のイメージが、想像力を歪める危険性がある。そもそも、原文は、詩的で格調高いものだった。訳文それ自体も、なかなか雰囲気を出している。しかし、その解釈に、少々誤解があったのではないか。一つは、〝むかし話〟風の挿画。意図はわかるのだが、重いファンタジイを想定した原文と、明らかに不釣り合いである。本来この作品は、日本の中世怪談集に見られる、妙なおどろおどろしさが主題のように思えるのだ。また、登場人物の名も、英語の中にローマ字で書かれているのと、日本語としての漢字とでは、どうしても差異が目立つ。結局、誤訳云々以上に、翻訳の難しさを、改めて感じさせた一冊だった。（俊）